

# 『古事記』の英訳

## —翻訳にあらわれる日本文学の特徴について—

井上さやか

### 1 はじめに

本稿では、19世紀後半に出版されたカール・フローレンツ『Dichtergrüsse aus dem Osten』によって起こった「最初の比較文学論争」について触れた上で、本共同研究中に刊行された『古事記』の新英訳本 Gustav Heldt『THE KOJIKI: An Account of Ancient Matters』と旧訳本2種の比較結果について報告する。筆者の語学力不足のために十分な検証ができていないとは言い難く、扱う事例もごく一部に過ぎないが、翻訳を通して逆照射される古代日本文学の特徴について、その一端を述べたい。

### 2 最初の比較文学論争

本共同研究においては、『万葉集』の最初の外国語訳についても討議された。筆者が以前に、「NARA 万葉世界賞」（奈良県主催）の審査委員であるドナルド・キーン氏から、それはたった1首ではあるが19世紀のフランス語訳であった、と聞いたことを手がかりとして調査が進められた。その結果、ドイツ出身の東洋学者クラプロート（1783-1835）による巻18-4097番歌のフランス語訳であることがわかった。詳細については、小倉久美子研究員の報告を参照されたい。

ただし、18世紀以前に日本語との接触があったと考えられるオランダ語やポルトガル語等の文献については、今回の共同研究では未確認である。キーン氏の指摘について詳細の確認はできたが、それを越える発見には至らなかったともいえる。今後の研究を待ちたい。

同じく19世紀も後半になると、いわゆるお雇い外国人であったカール・フローレンツによる『Dichtergrüsse aus dem Osten』（邦題：東の国からの詩の挨拶<sup>1)</sup>）が刊行された。そのことにより、上田万年との間に「最初の比較文学論争」が巻き起こったことを、千葉宣一氏が指摘している。

その論争は明治28年（1895）に創刊された『帝国文学』誌上で展開された。記念すべき創刊号（1895年1月刊）の「寄贈書目」には、帝国文学会への寄贈図書第1号として、カール・フローレンツ著『Dichtergrüsse aus dem Osten』が紹介されている。フローレンツはその時、帝国大学で教鞭を執っており、発足時からの同学会員でもあった。

同年2月には第2号が発行されるが、その号に早くも上田万年による批判が掲載されている。俳句など短詩の翻訳は2行程度で工夫すべきだと主張し、「これにてはあまりに原作が、可愛想なる者とはなり了らずや」と糾弾した<sup>2)</sup>。

この上田の批判に対して、「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」と題したフローレンツの反論が、翌3月発行の第3号に掲載されている。

日本と欧州と、その言語に根本的差違の存せるは姑く之を惜くも、その詩的理想に於て、両者の間に一大溪谷の横はれるを見る。（中略）若し良好なる翻訳に依りて、之を欧州の評家に示さば、彼等も亦かゝる短詩の中に讚嘆すべきもの多きを見るべし。然れども彼等は頃刻にして之れに厭き、更らに邃奥なる長編の作を見んことを望むならん。故に善良なる長歌の翻訳百篇は短歌の翻訳万篇

よりも、日本文学の光栄を高むること遙かに大なるべし。是れ余の確言せんとする所なり<sup>3)</sup>。

ここからは、フローレンツの「翻訳」への態度と日本詩歌への思いとをくみ取ることができよう。

その後も、フローレンツの反論に対する上田の再反論（「フローレンツ先生の和欧詩歌比較考を読む」同第5号・同年5月）、上田の再反論に対するフローレンツの再反論（「上田文学士に答ふ」同第7号・同年7月）、フローレンツの再反論に対する上田の再再反論（「再びフローレンツ先生に答ふ」同第9号・同年9月）と論争は続いたが、上田の批評は最後には、「徒に嫌悪と焦燥に満ちた私的感情が露呈するのみ」に陥ってしまっているとの指摘もある<sup>4)</sup>。そうであったとすれば、明治時代の国際派日本人エリートとして、自尊心と劣等意識という相反する感情に襲われていたのかもしれない。

フローレンツが、ドイツ語圏の読者の評価に耐え得るようにとの配慮から、長歌を多く採歌していたことは事実である。当該書では、古代から現代までの日本の詩歌の中から約60首を選びドイツ語訳しているが、その内30首以上が万葉歌であり、ことに巻13の作者未詳の長歌が多いことが特徴的である。高橋虫麻呂の浦島子歌（9-1740～1）を、「叙事詩」という項目を立ててとくに取り上げたことも留意される<sup>5)</sup>。

本稿で注目したいのは、この論争によって、日欧間の「詩的理想」の隔たりが明確化されたことである。上田が具体例として取りあげたのは俳句の翻訳についてであったが、短詩型を主とする日本詩歌を長歌を中心に紹介することや、短詩形式ではなく多くの言葉を補って説明的に翻訳することで、異なる言語文化圏へ伝えようとすることの是非をめぐっての論争であったといえるだろう。

ちりめん本の研究で知られる石澤小枝子氏は、当該書について次のように紹介している。

序文では、日本には実に豊かに詩があること、その特徴についてはその多くが短詩型であり、独創的な表現も見いだせるが、まず何よりも独特の日本的言語表現には技巧をこらしていることを述べている。詩的内容をもっとも多く盛っているのは、日本最古の歌集である八世紀の『万葉集』にほかならないとも言っている<sup>6)</sup>。

フローレンツは、日本語文化の特徴も魅力も十分に理解していた。その上で、まずは欧州の「詩的理想」にかなう翻訳を提示し、日本文学への入り口を提供しようとしたものと考えられる。その後より深い内容の専門書を執筆していたものの、戦火で消失し、日本人が外国語といえば主に英語を学ぶ風潮がある現状から、フローレンツの問題提起とその業績は知る人ぞ知るものとなった<sup>7)</sup>。

言語が異なればそれぞれの語の背景にある思想や概念も異なり、それらを異言語に置き換えることがいかに困難であるか、翻訳を試みる際には必ず降りかかる問題である。しかしそれは、何が異言語に容易に翻訳できないのか、すなわち当該の言語文化の特徴とは何かを逆照射することにもなる。それは、よくあるような自国と他国との文化間の“差異”を、“優劣”としてとらえようとするとは根本的に異なる。

そうした問題意識を念頭に置きながら、次に具体例として、新旧の『古事記』英訳本を取り上げ、比較してみたい。

### 3 『古事記』英訳本3種の比較から

本共同研究を開始した2014年に、現代アメリカの大学生を対象としたテキストシリーズのひとつとし

て Gustav HELDT 氏による『古事記』の新全訳が出版された<sup>8)</sup>。記紀万葉の英語訳はこれまでも複数刊行されているが、そのなかでも、1906 年刊の Chamberlain 版<sup>9)</sup>、1968 年刊の Philippi 版<sup>10)</sup>、そして 2014 年刊の Heldt 版を比較してみたい。そこには三者三様の「翻訳」態度が窺え、日本語文学との相違点も浮き彫りになっている。

Heldt 版の底本は、山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集 1 古事記』(小学館、1997 年刊)であることが明記されている。そもそも古典文学作品を「翻訳」する場合、一種類の底本を忠実に逐語訳することはほとんどない。写本が複数系統ある場合も多く、研究が進むことで時代によって本文も解釈も変わり得る。翻訳者自身が複数のテキストや注釈書にあたり、より妥当と考える説を選んで「翻訳」する必要があるのである。

Heldt 版にしても、原則として上記の底本の解釈に拠りつつも、底本に付されている注などは一切省かれている。そればかりか、神名等の固有名詞をはじめとした難解な古代日本語については、思い切った意訳を施している。具体例は以下に示すが、本書の取った手法により、英語圏の一般読者にとって『古事記』が格段に親しみやすく読みやすくなったのではないかと推察される。

一例として、『古事記』の冒頭部分を掲出し、三者の翻訳を比較しておきたい。

天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神。[訓高下天云阿麻。下効此。] 次、高御産巢日神。次、神産巢日神。此三柱神者、並独神成坐而、隱身也。

あめつちはじ あらは とき たかあまのほら な かみ な あめの み なかぬしのかみ たかみ む すひのかみ  
 天地初めて発れし時に、高天原に成りし神の名は、天之御中主神。次に、高御産巢日神。次に、  
 かみ む すひのかみ こ みはしら とも ひとりかみ ま み かく  
 神産巢日神。此の三柱の神は、並に独神と成り坐して、身を隠しき<sup>11)</sup>。

上記の本文および書き下し文は、Heldt 版の底本である新編日本古典文学全集本『古事記』の冒頭部分である。「天地初発之時」だけでも様々な訓読例があるが、いまは底本の訓みに従って論を進める。

同箇所を Chamberlain 版は次のように訳してみせた。

The names of the Deities <sup>1</sup> that were born <sup>2</sup> in the Plain of High Heaven <sup>3</sup> when the Heaven and Earth began were the Deity Muster-of-the-August-Centre-of-Heaven,<sup>4</sup> next the High-August-Producing-Wondrous Deity,<sup>5</sup> next the Divine-Producing-Wondrous-Deity.<sup>6</sup> These three Deities were all Deities born alone, and hid their persons.<sup>7</sup>

<sup>1</sup> For this rendering of the Japanese word kami see Introduction, pp.xix-xx.

<sup>2</sup> Literally, “that became” (成) . Such “becoming” is concisely defined by Motowori as “the birth of that which did not exist before.”

<sup>3</sup> In Japanese *Takama-no-hara*.

<sup>4</sup> *Ame-no-mi-naka-nushi-no-kami*.

<sup>5</sup> *Taka-mi-musu-bi-no-kami*. It is open to doubt whether the syllable bi, instead of signifying “Wondrous,” may not simply be a verbal termination, in which case the three syllables musubi would mean, not “wondrous producing,” but simply “producing,” i.e., if we adopt the interpretation of the Verb musubu as “to produce” in the Active sense of the word, an interpretation as to whose propriety there is some room for doubt. In the absence of certainty the translator has followed the view expressed by Motowori and adopted by Hirata The same remark applies to the

following and other similar names.

<sup>6</sup> Kami-musu-bi-no-kami. This name reappears in later Sections under the lengthened form of Kami-musu-bi-mi-oya-no-mikoto, i.e., His Augustness the Deity-Producing-Wondrous-August-Ancestor, and also in abbreviated forms.

<sup>7</sup> I.e., they all came into existence without being procreated in the manner usual with both gods and men, and afterwards disappeared, i.e., died.

(Basil Hall Chamberlain, "THE KOJIKI: Records of Ancient Matters")

はじめの4行が本文の訳であり、棒線以下はそれに対する注である。実際に本を開くと、1ページの大半が注で占められている状況である。太線や波線は私に引いたものだが、太線部は地名、波線部は神名である。本文では意識をしつつ、注において日本語の発音を示し、さらに詳しく説明を加えている。「高天原」をタカマノハラ、「高御産巢日神」「神産巢日神」をタカミムスビノカミ・カミムスビノカミと訓むのは、当時の学説に拠ったとみられる。ムスビという語の解釈への疑義も提示し、そのように確実な解がない場合、本居宣長や平田篤胤の見解に従うことが表明されている。こうした態度からみても、一部の専門家を対象とした書であることは明白である。1906年当時の研究状況を踏まえた「翻訳」であり、今後は同時期の日本国内の研究状況と比較することも有用かと考える。

Philippi 版では、同じ箇所が次のように訳された。

At the time of the beginning of heaven and earth,<sup>1</sup> there came into existence in TAKAMA-NÖ-  
PARA a deity named AMĒ-NÖ-MI-NAKA-NUSI-NÖ-KAMĪ; next, TAKA-MI-MUSUBI-NÖ-KAMĪ;  
next, KAMĪ-MUSUBI-NÖ-KAMĪ. These three deities all came into existence as single deities,<sup>2</sup> and  
their forms were not visible.<sup>3</sup>

(Donald L. Philippi, "KOJIKI: Translated with an Introduction and Notes")

一部の専門家を対象とした書という意味では Chamberlain 版と同様である。「高天原」をタカマノハラとするように、Chamberlain 版とは逆に、言語学的な見地から発音そのものが本文に組み込まれており、同ページ内には以下のような脚注が付されている。

<sup>1</sup> See ADDITIONAL NOTE 1 for a discussion of the cosmogony of this chapter. For discussions of proper names see GLOSSARY.

<sup>2</sup> Pitōri-gamī; unlike the pairs of male and female deities who came into existence later, these deities came into being one by one and had no counterparts. However, it later becomes apparent that both Kamī-musubi-no-kamī and Taka-mi-musubi-nō-kamī had children (cf.30:4; 38:5) .

<sup>3</sup> Or 'they hid their bodies.'

(Donald L. Philippi, "KOJIKI: Translated with an Introduction and Notes")

日本神話における宇宙の考え方については別ページを参照するよう促し、「single deities」(Pitōri-gamī「独神」)という概念についても解説を加えている。書名に注釈と翻訳と明示されたとおり、詳細な注を付し専門的な議論を提示することに主眼があったとみられる。

一方、Heldt 版では、次のとおりである。

When heaven and earth first appeared, the names of the spirits who came about in the high plains of heaven are these:

First was the spirit Master Mighty Centre of Heaven.

Next was the spirit Lofty Growth.

Next was the spirit Sacred Growth.

All three spirits were single and concealed themselves.

(Gustav Heldt “*THE KOJIKI: An Account of Ancient Matters*”)

脚注等は一切省かれており、研究者ではない読者がページを開いても、あまりの注の多さに圧倒される事態はおきないだろう。注を省いただけでなく、説明的な訳も極力避けたとみられる。訳語もシンプルで、大学生向けのテキストであることから、読みやすさを重視したと考えられる。

たとえば、「高天原」は「the high plains of heaven」とある。Chamberlain 版の「the Plain of High Heaven」と一見すると似ているが、Heldt 版はより明確にキリスト教的な天国を想起させるのではないかと感じられる。古代日本における「天」<sup>あめのみ</sup>の概念と同じとはいえないが、遙か頭上に観念された神の国という、ある程度重なるイマジネーションを伝える役目は果たしているのだろう。脚注を省く以上、こうした処理は避けて通れなかったと思われる。

また、Chamberlain 版と Philippi 版がともにムスビと発音していた神名については、新編日本古典文学全集本においてはムスビと清音でよまれており、「生成」と「靈力」であるとの注がある。「高御産巢日神」「神産巢日神」をタカミムスビノカミ・カミムスビノカミと訓み、「高」「神」はいずれも神聖さを表す語彙であり、ともに「すべてを導く根源的な生成のエネルギー」であると解されている。そこで Heldt 版ではそれらの注を参考にしつつ、高貴な (Lofty) 神聖な (Sacred) と訳したとみられる。

さらに、Chamberlain 版と Philippi 版がともに多神教の神格を表す「deity」の語で古代日本の「神」を表すのに対して、Heldt 版は「spirit」を採用しており、より一般的かつ一神教とは異なる神観念を伝え得る語彙として選択したかと思われる。自然物の生命力である意味合いが強調されているという見方もでき、日本的な自然観を踏まえてより近づけようという意図もあったかもしれない。

この後に続く「伊耶那岐神」<sup>いざなみのかみ</sup>と「伊耶那美神」<sup>いざなみのかみ</sup>の場合でも、Chamberlain 版は「the Deity the Male-Who-Invites」と「the Deity the Female-Who-Invites」と訳した上で、やはり詳細な脚注を加えている。Philippi 版は先掲の例と同様に、本文では発音を転写するだけであり、注がなければ英語圏の読者には一読しただけでは意味不明だったことと思われる。Heldt 版では「the spirit He Who Beckoned」と「the spirit She Who Beckoned」とあり、注は無い。「Invites」ではなく「Beckoned」を用いたのは、より古風な言葉遣いを意識したかとも考えられる。

このような古代日本における「神」の概念を英語でどう訳すかという問題については、Chamberlain 版が次のように言及している。

Of all the words for which it is hard to find a suitable English equivalent, Kami is the hardest. Indeed there is no English word which renders it with any near approach to exactness.

日本語に対応する適切なことばが英語に存在せず翻訳が難しい場合があり、なかでも最も難しいのが「神」を表現することだという。「翻訳」は、単純に語彙を置き換えることなく、異言語文化を理解

した上で母語である言語文化の中に再構築する、というような極めて困難な行為であることがうかがえる。

なお、Heldt 版の巻末には日本地図とともに古地名が紹介されている。発音とその意識が添えられていて、ここでも言葉遊びのような大胆な置き換えがなされていた。たとえば、「紀伊国」は、「木国」とも書かれることから、本書では単に「Woods」と訳されている。また、「出雲国」は「Billowing Clouds」といった具合である。

英単語だけ見ていると逆にわかりにくいかもしれないという危惧もあるが、漢字、しかも万葉仮名という当て字のような独特の漢字の使用法を知った上でみる場合は、とても興味深く感じられることだろう。

これらの翻訳態度に抛り、結果的に本の厚みも軽減され、初学者にとっても手に取りやすい体裁となり、従来の全訳本に比べて『古事記』のストーリーそのものを追うことに集中できる本となったのではないかとみられる。

#### 4 和歌表現をどう訳すか

次に、もっとも困難ともいわれる和歌の翻訳例に触れておきたい。『古事記』には古代歌謡と呼ばれるウタが含まれており、なかでも『万葉集』に共通して採録されたウタが存在する。ここでは次の短歌1首を取り上げる。

故、後亦、不堪恋慕而、追往時、歌曰、

岐美賀由岐 氣那賀久那理奴 夜麻多豆能 牟加閑袁由加牟 麻都尔波麻多士〔此、云山多豆者、是今造木者也。〕

故、後に亦、恋ひ慕ふに堪へずして、追ひ行きし時に、歌ひて曰はく、

87 君が行き 日長くなりぬ 造木の 迎へを行かむ 待つには待たじ（此の、山たづと云ふは、是今の造木ぞ）

（山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集1 古事記』小学館1997年）

『古事記』下巻の允恭天皇条にある、軽太子と軽太郎女との禁じられた恋の物語中の1首である。原文を見ると、地の文とは区別され、一字一音表記で発音が明確に示されていることがわかる。これは『万葉集』の表記方法とも相通じている。

配流された軽太子の帰りを待つのではなく迎えに行こうと決心する内容で、「やまたづの」は枕詞とされ、葉が対となるように向かい合って生える植物であることから「迎え」を導き出す働きを持つ。こうした枕詞や序詞は「連合表現」とも呼ばれ<sup>12)</sup>、古代和歌に特徴的な技法である。

枕詞・序詞は、いずれもある語句を修飾する働きを持つが、歌全体の主意には直接関わらない点で共通しており、その修飾方法は音の類似や比喻や連想などに基づく。現代では意味不明となっている例も多く、語調を整えるものとして現代日本語に翻訳する際には無視されている場合も多い。しかし、とくに短歌の場合、31音中の5音またはそれ以上を使ってわざわざ意味の無い描写をしたとは考え難い。可能な限り古代的な意味を探るのが、穏当な態度だと考えている。

Heldt 版では、当該歌は次のように翻訳されている。

So later on, unable to bear her pangs of longing any longer, she set off after him and sang a

song that said:  
Since my lord set out,  
the days grow ever longer.  
As leaves of the mountain elderberry  
face one another, would I go greet him.

I can wait and wait no more.

(This mountain elderberry is known as the royal representative tree) .

「やまたづ」とは「造木」であると記した細注についても、括弧書きで訳出されている。ここで比較のために、現代英詩としての完成度が極めて高いと定評のある、Edwin A. Cranston 訳『A Waka Anthology: VOLUME ONE: The Gem-Glistening Cup』の事例を紹介しておく。

Then afterward, unable to bear her longing, the Princess followed him, at which time she sang:

Kimi ga yuki	Long now are the days
Kenagaku narinu	Shince my lord has gone away;
Yamazazu no	As elder leaves meet,
Mukae o yukamu	So shall I go and meet him,
Matsu ni wa mataji	And not wait an endless wait.

What is here called yamazazu[elder] is our present miyatsukogi.<sup>13)</sup>

左側に日本語の発音を提示し、その部分に該当する英訳を右側に配置して、対照できるようになっている。

Heldt 版は、先掲の神名と同様に、日本語の発音は一切紹介することも脚注にすることもなく、訳文のみを載せている。「(This mountain elderberry is known as the royal representative tree) .」の部分も、もともと『古事記』本文に付されている注であり、英語訳のための注ではない。Cranston 訳の最終行もそれに該当するが、「yamatazu」「miyatsukogi」などの日本語発音をそのまま紹介するのに対して、Heldt 版は一貫して日本語の発音を採用していない。

枕詞である「Yamazazu no」は、「yamatazu」という植物名を使用して、その葉が向かい合って生えることから「迎え」を象徴する表現である。

万葉歌の現代日本語訳では、しばしば枕詞を括弧に入れて訳さないという態度がとられるが、Heldt 版では「As leaves of the mountain elderberry / face one another, would I go greet him.」と、エルダーベリーの葉が互いに向き合っているのと「山たづの」を文脈中に表現しようとしており、Cranston 訳でも「As elder leaves meet, / So shall I go and meet him」エルダーの葉が会うように、と訳出されている。

歌の内容を損なわずに英語詩としての格調も高く訳そうとしたのが Cranston 訳であり、読みやすさを最優先し意味が通じ易くしたのが Heldt 版であるとみられる。いずれも、『古事記』の中の歌謡を、英語圏の詩として換骨奪胎したといえるだろう。

関連してもう一つ注目しておきたいのは、従来訳が『古事記』を散文として訳すのに対して、Heldt

版は歌謡部分だけでなく、地の文についても詩的なリズムを意識して訳したとみられる点である。

Heldt 版では、先掲のとおり冒頭の「独神」が次々に生成する部分を「First was …」「Next was …」と、短い一文を改行しつつ連ねてみせることで、叙事詩のようなリズムが生み出されているといえよう。こうした翻訳態度は全体を通じて一貫しており、『古事記』の原型が稗田阿礼による唱誦であったことを彷彿させる。

また、もう一つ注目しておきたいのが、擬音語や擬態語についてである。日本語の特徴として、しばしば擬音語・擬態語の多さが指摘される。それは現代日本語だけでなく、古代日本語にも共通していることである。

たとえば、次の有名なシーンにも次のような特徴的な表現が登場する。

故、二柱神、立〔訓立云多々志。〕天浮橋而、指下其沼矛以画者、塩許々袁々呂々邇〔此七字以音。〕画鳴〔訓鳴云那志也。〕而、引上時、自其矛末垂落塩之、累積成嶋。是、淤能碁呂嶋。〔自淤以下四字以音。〕

（『古事記』上巻）

故、二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指下して画きしかば、塩こをろこをろに画き鳴して、引き上げし時に、其の矛の末より垂り落ちし塩は、累り積りて島と成りき。是、淤能碁呂嶋ぞ。

（『新編日本古典文学全集1 古事記』）

イザナキとイザナミが海の塩を「許々乎々呂々（こをろこをろ）」に掻き混ぜる描写は、Chamberlain 版では「curdle-curdle」とあり、凝固させる意味の単語を繰り返している。同じ箇所を Philippi 版では「a churning-churning sound」としており、攪乳を意味する単語を繰り返している。いずれも脚注として解説を加えていることはいうまでもない。

一方、Heldt 版は注は付さず「its brine sloshed and swished about as they churned it」と訳出している。水や泥を振り動かす意味の「sloshed」と、振り回す音を表現する「swished」を用いることで擬音語のニュアンスを伝えつつ、文意を優先した結果とみられる。

現代日本語に「翻訳」することも同様に難しいが、幸いに古代の発音が表記され伝わることから、オノマトペとして感覚的に享受されている。

## 5 おわりに

以上、最初の「比較文学論争」や、『古事記』英訳本三種の具体事例の比較を通して、日本語文化の特徴について逆照射されるものについてみてきた。短詩型の詩歌はその最大の特徴ともいえ、古代和歌によくみられる枕詞の意義についても再確認することとなった。

日本神話においては、万物に神を見出し、それぞれの神の名前は現在では意味が不明の場合もあるが、太陽や月、雲や木や水といった物や自然現象を表している。一方で、日本語にとって漢字は外国語の文字であり、本来は発音にこそ重要な意味があった。それぞれの英訳本は、そうした日本語文化の根底にあるものや文字表記の二重性を、日本語と英語の間で捉えようとしているようにも思われた。

『古事記』はその序文に拠れば712年に完成したという。第二次世界大戦に象徴される帝国主義の日本において政治的に利用された経緯があり、戦後はタブー視された時期もあったが、近年は古代文献としての価値を見直す機運が高まっている。2012年には完成から1300年を迎え、日本国内を中心に関連



書の出版や関連展示なども相次いだ。以前は、近世になって本居宣長が「発見」したとされていたが、近年では、宣長以前である中世に寺社を中心に読まれていたことが明らかにされており、現代にいたるまで断続的に読まれてきたと考えられている。

かつて、世阿弥は『風姿花伝』（第四神儀云）において、アメノウズメノミコトの踊りに申楽（能楽）の起源を求めた。また、三島由紀夫は少年時代に『古事記』を愛読したといい、後に中編「軽王子と衣通姫」を著した。そして現在も、さまざまな芸術家にインスピレーションを与え続けている。最近では、昨年10月に開催された東京オリンピック等のキックオフイベント「スポーツ・文化・ワールド・フォーラム」公式プログラムにおいて、『古事記』から現代に連なる多様な“日本”を紹介するショー「The Land of the Rising Sun」も上演された（主催：文部科学省／演出：宮本亜門氏／出演：市川海老蔵氏、森麻季氏、鈴木亮平氏、他）。

これらはほんの一例に過ぎないが、実に多くの人々が時代や国境を超えて『古事記』に不思議な魅力を感じてきたといえるだろう。

そして、本共同研究を通じて痛感したことは、古典文学の翻訳は底本を決めその逐語訳をするだけでは伝わらないという事実である。古語の現代語訳の場合にも、それは当てはまることである。個々の作品の文学としての面白さをどうすくい取りどう伝えるか、それが「翻訳」の肝であり、多文化共生の現代において日本古代文学を研究する意義でもあると考える。

#### 注

- 1) 石澤小枝子『明治の欧文挿絵本—ちりめん本のすべて』三弥井書店 2004年
- 2) 上田万年「批評 Dichtergrüsse aus dem Osten. ドクトル、フローレンツ訳」『帝国文学』第2号、明治28（1895）年2月
- 3) カール・フローレンツ「日本詩歌の精神と欧州詩歌の精神との比較考」『帝国文学』第3号、明治28年3月
- 4) 千葉宣一「明治期における“比較文学”の運命—比較文学への道・比較文学からの道—」『現代文学の比較文学的研究—モダニズムの史的動態—』八木書店 1978年
- 5) 拙稿「『万葉集』と欧文挿絵本—その今日的意義について—」『万葉古代学研究所年報』第8号、2010年3月
- 6) 注1に同じ
- 7) 佐藤マサ子『カール・フローレンツの日本研究』春秋社 1995年
- 8) GUSTAV HELDT “THE KOJIKI: AN ACCOUNT OF ANCIENT MATTERS”, 2014 Columbia University Press
- 9) Basil Hall Chamberlain “THE KOJIKI: Records of Ancient Matters”, Second Edition With Annotations by the late W. G. Aston, 1981 TUTTLE PUBLISHING, originally published in 1906
- 10) Donald L. Philippi, “KOJIKI: Translated with an Introduction and Notes”, 1968 University of Tokyo Press
- 11) 山口佳紀・神野志隆光校注『新編日本古典文学全集1 古事記』（小学館 1997年）に拠る
- 12) 中西進「万葉集の連合表現」『万葉集研究』第2巻、塙書房 1973年
- 13) Edwin A. Cranston “A Waka Anthology: VOLUME ONE: The Gem-Glistening Cup”, 1993 Stanford University Press